

知的障害者のグループホーム ベレヴュー 15

「イースタッドって古都で、ステキな町よ」北欧画家の深井せつ子さんが言っていたことがこころに残っていた。

人口 30 万人をこえたスウェーデンの南端・マルメから郊外電車で1時間。海辺の町・イースタッド (Ystad) は人口 2 万 8000 人の自治体だ。

顔の見える小さな規模の町で障害者や高齢者が実際どう暮らしているのか「見てみたい。聞いてみたい」これはわたしたち北欧ツアーの一貫したスタンスだった。

知的障害者のグループホーム「ベレヴュー 15」を訪問したが、めちゃくちゃ歓待された。地元新聞の取材も入り、いろんなことがなんでも聞けた。施設名の「ベレヴュー 15 (Bellevue 15)」は住居表示と同じだそうだ。

*

自治体の障害者支援責任者のマリアが、この町とスウェーデンのとりくみを解説してくれる。

・この 10 年の間に障害者のくらしは大きな変化があった。

・1900 年代はじめは、強制的に施設入所され、日常は社会生活から隔離されていた。

・1968 年に教育を受ける権利が確認され、介護、住居、仕事も権利として認められるようになった。

・1994 年、L (権利) S (サービス) S (サポート) 法 (機能障害者を対象とする援助及びサービスに関する法律) が実施される。

・「個人の希望にあわせる」こと「個人が健常者と同じように生きられること」

・LSS 法には 3 つのグループがある。①知的障害者と自閉症、②高次脳機能障害者、③重い機能障害の



ある人

・この法律により住まい、パーソナルアシスタントが保障される。

・ここのグループホームは「住まい」=個人が入居する「アパート」として住んでいる。なので「キッチン」も普通のアパートにあるよう完備されている。

・45 平米 (バス+キッチン) の個室面積と共有スペースの基準は LSS 法による。

・ここには 8 人が住んでいるが、多くは 5 ~ 6 名の「アパート」で、町に 10 カ所ある。

*

つぎにこの道 30 年というここ以外も含め複数の施設責任者のオーラ (Ola Sandell) が話してくれた。

・ここは 2009 年開設で、現在 8 人が入居している。スタッフは 9 人で 24 時間体制。

・スタッフは「アンダーナース (高校で資格)」の専門教育を受けている。

・利用者の多くは日中はデイセンターに通っている。週に一度、洗濯したり、自由に買い物したり、日常生活をおくる日がある。

・問題がある場合は、24 時間お手伝いできる。電話くれれば部屋にすぐ行く。

*

利用者のエマさんがにこやかに語りはじめた。

「いま 33 歳。1、2 万人に一人と言われるウイリアムシンドロームです」「肺に血栓があり、肺炎にもなったことがある」「二度ほど死にかけたが、女性の”サムライ”としてがんばる」「『ガクト』の歌が救ってくれた。日本はスピリットのある国だ」「愛情のたくさんある人やオープンな人たちでみんなと行動したい」「今日、夢が一つ実現した。みんな



など会えて、とっても嬉しい！」。

さらに、熱が入る。「これ以上いい住まいはないのではと思っている。ここでは（ひとりの人間として）普通に接してくれる」「人間性のある人たちがかりで、わたしを障害者として接してはいない」「里子として、いろんなところに住んできた。3カ所ではひどい扱いをされた」。

＊

2階にあるエマさんのリビングもベッドルームも案内してくれた。

「料理は自分でします。得意です。夜は簡単な肉団子、ハンバーグ、パスタもつくる」「ミンチソースのパスタが好き。お菓子を焼くのも得意」「この間は友だちがここに来て、泊まってくれた」。

◆質問＝「付き合ってる人はいますか？」。

エマさん＝「います。ボーイフレンド。でも友だちはいるが特別な人はいない。日本でだれかいれば紹介して」

◆質問＝「なにを楽しんでるの？」。

エマさん「コーヒーショップ、映画館、ショッピングが大好き」「一週間に一度は学校にも行っている。英語、歴史、スウェーデン語。9時～14時まで」。

◆質問続出＝「それは特別学校？」「高校レベルの特別学級？」「お金の出所は？教育予算？」

エマさんやオーラの回答を整理すると、
○エマさんは19歳で普通高校を卒業。現在は自分の意思で学校に行っている。
○行っているのは、成人学校（難民や語学学習の人らも対象）の特別学級（6人）。

＊

もう一人のアンダースさんが「オレのところも見ていいよ」と言ってくれる。

ブルーで統一されたシックな部屋。サッカーとハードロックが好きだそう。

すてきな女性と一緒に写真があったので、「彼女なの？」と聞くと、彼は隣の部屋に視線を移す。

オーレさんが「彼女は向かいの部屋にいるんだよね～」と確認してくれた。

「日本代表は一足先にロシア行きを決めたよ」とわたしが言うと、彼は、「来週はトットナムのゲームを見に行くんだ」。夜勤専門のスタッフ含め4人



でロンドンにサッカー観戦に行くのだそう。

（菌部英夫）

＜補足＞

「すてきなグループホームで、みんな自分らしい自己実現をしている姿は、感じられたけど、65歳を過ぎたらどうになってしまうの？福祉サービスは変わるの？費用は？」などの質問がありました。

スウェーデンでは、65歳（退職年齢）で制度は変わります。いわゆる「障害者年金（早期年金）」から「年金」ベースに入るようです。

ですが、「同年齢の市民と同等の生活」が保障される国です。年金額はほとんど変わらず、支払う費用はその人の収入によるので、ほとんど変わらず、希望があればその「住まい」に住み続けられると聞きました。

ただ、生活状態にどんな困難が生まれ、どんな支援を必要とするかによって、選択する「住まい」は変わってくるものとも思います。障害のある人が重度化や認知症などの関係でどう「住まい」を選択しているのか、具体的に知ることは今後の課題です。



▲私たちの訪問を報じる地元紙